

## ショパンコンクールに挑んだ日本の若者たち

藤原 道夫

昨年（2021）秋に1年遅れでショパン国際ピアノコンクールが開催され、その過程がクラシック音楽界の話題をさらった。反田恭平が2位、小林愛実が4位に入賞、日本人の2位は内田光子以来51年ぶりの快挙だ。若者たちの活躍はまさに「後世畏るべし」といえよう。

反田の演奏はこれまでにTVで何度か聴いている。音にも人物にも、スケールの大きさを感じていた。1月のN響定期でパデレフスキ作曲「ポーランド幻想曲 作品19」を演奏し、抑制の効いた端正な音を聴かせてくれた。

入賞後に知った反田の考えは大変興味深い。ショパンコンクールに出場する目的で、桐朋女子高音科を卒業した後、モスクワ音楽院を経由して本場のショパン国立音楽大に入学した。しかもコンクール会場近くに住んだとのこと。これらがよい結果につながったのだろう。

彼はすでに若い音楽家を集めて楽団を結成している。出場機会を与えながら有能な音楽家を育ててゆきたい意向だ。これは容易なことではないだろう、才能をしっかりと見極める必要もある。将来は世界に通用する音楽家を育成する機関を作りたいとも語っていた。日本の音大における指導法に問題を感じているのだろうか。自身はショパンコンクール2位のパスポートを携え、今後世界の音楽家との交流を拡げてゆきたいと言う。

2月のN響定期に、来日できなくなった外国人ピアニストに替わって小林愛実が登場し、シューマンの「ピアノ協奏曲 イ短調 作品54」を弾いた。コンクール本選は彼女にとって2度目の挑戦で、演奏する姿に悲壮感が漂っていた。4位に入賞して帰国した後の今回の公演ではリラックスした様子で、粒だった美しい音をなめらかに紡ぎ出していた。アンコールに弾いたショパンのワルツも繊細な音が際立つ演奏だった。

78人中本選に進んだのが12人、そこには入らなかったが一步手前の3次予選まで進んだ角野隼斗も注目を集めたようだ。この人はユー・チューブで活躍しており、「かていん」の名でよく知られているらしい。彼は芸大に合格したものの、そこでは音楽しか学べないと東大に入学し、情報工学を専攻したという変わり種。コンクール中のピアノ演奏では品格のある繊細な音を響かせていた。コンクールとは別の機会に弾いた自作「大猫のワルツ」も聴くことができた。見事な演奏だった。今後ピアノの演奏を新しい場へと拡げて行くことだろう。